

□ 書評 □

川久保清(著)

運動負荷心電図 その方法と読み方

村山正博

(聖マリアンナ医科大学学長)

循環器病学を専攻した後、私に最初に与えられたテーマが運動負荷心電図であったが、それが縁で運動心臓病学が終生のテーマとなった。当時、無線搬送によるテレメータ心電図が始まった頃であり、私の学位論文は「運動負荷中及び後の空間的ST-T変化の研究」であった。その頃の最大のテーマは虚血反応判定法と運動負荷試験の方法に関するものであったが、それらの方法や基準の標準化を図る目的で1975年(昭和50年)に木村栄一先生(当時、日本医大教授)を世話人代表として「循環器負荷研究会」が発足した。その後、テーマの範囲も広がり、この研究会は現在まで隆盛が続いている。運動負荷試験は虚血評価にとどまらず心機能評価・治療効果判定、運動処方作成、さらにスポーツにおけるメディカルチェックの領域で広く利用されるに至り、また評価指標も心エコー図、核医学的指標、呼気ガス分析、代謝産物などまで広がっている。しかし、簡便かつ記録が正確で情報量の多い運動負荷心電図が基本であることは間違いない。

著者の川久保清氏は私より一回り以上若いですが、当時、学園紛争などで入局者が皆無であった空白の時期を経て、ようやく研究室に入ってきた私の共同研究者第1号であった。その後、職場は違っても私の一生の友として現在に至るまで共通のテーマと夢を持ち続けてきた仲である。本書に出てくる心電図のいくつかは私に

も記憶に残っているものがあり、感慨を覚えた。著者は当時から大変な熱意と工夫をもって研究を進めていたが、学位論文となった運動負荷心電図マッピングを多数の電極と絡み合うような多数のコードを工夫して記録していた時の姿を懐かしく思う。本書の「はじめに」に書かれてある「本法の活用による不必要な侵襲的検査の削減」が著者の哲学であるように思うが、賛意を表したい。日本循環器学会や日本心電学会の本法に関するガイドライン作成にも著者は大きな貢献を果たした。

本書の特色は、何よりも著者の長年にわたる経験が随所に示されていることで、解説も明確で判りやすい。「SIDE MEMO」の項はおそらく著者がもっとも関心を持ってきた項目であろうが、それを読むだけでも本法の発展と今後の展望が開けるような気がする。厚生省の21世紀における施策である「健康日本21」構想遂行には運動は欠かせない手段であり、その意味でも本法は医療機関のみならず、保健・体育施設さらに産業医学の現場においても必須の方法となるものと思われる。一方では、運動負荷試験が面倒になったとか、危険になったという意見も耳にするが、基本的な考え方や手順さえ理解していれば決してそのようなことはない。本法に畏れを抱く人にとっても本書は、不安の解消にはうってつけの本である。

本書がハンディで手頃な厚さであるのも良い。本邦では、運動負荷心電図に関する入門書やガイドラインは少なく、本書のような実践的著書の利用価値は高いに違いない。循環器関連医師や検査技師はもとより、PTや保健・体育関係者など広く運動関連職種の人にも購読を勧めたい良書である。

● B5 頁160 2000

定価(本体4,700円+税) 送料実費